

十二月八日

映画文学人生論

原作：太宰治 (1941) 「婦人公論」
参考：『花火』(1942) 「文芸」
『散華』(1944) 「新若人」
『惜別』(1945) 「朝日新聞」
『十五年間』(1946) 「文化展望」
『人間失格』(1948) 「展望」

日本は。本当に大丈夫でしょうか

太宰治の『十二月八日』は「婦人公論」昭和十七年二月号に掲載された。

今日の日記は特別に、ていねいに書いておきましょう。昭和十六年の十二月八日には日本の貧しい主婦は、どんな一日を送ったか、ちよつと書いておきましょう。

百年後、どこかの土蔵の隅から発見せられて、百年前の大事な日に、わが日本の主婦がこんな生活をしていたということがわかったら、少しは歴史の参考になるかもしれないという日記体の小説だ。主婦の文章というだけあって、読みやすい。

烏賊二杯、四十銭、目刺し、二十銭。履物、六円六十歳。今月からは三円以上二割の税がつくということ、ちつとも知らなかった。先月末、買えばよかったなどと考えるのはいかにも貧しい日本の主婦らしい、

十二月八日、早朝、蒲団の中で、朝の支度に気がせきながら、園子（今年六月生まれの女兒）に乳をやっていると、どこかのラジオが、はつきり聞こえてきた。

「大本営陸海軍部発表。帝国陸海軍は今八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」。

朝ごはんのとき、思わず、

「日本は、本当に大丈夫でしょうか」と言った



十二月八日 —— 映画文学人生論

ら、「大丈夫だから、やったんじゃないか。必ず勝ちます」と主人はよそゆきの言葉で答えた。主人の言うことは、いつも嘘ばかりで、ちつともあてにならないけれど、でもこのあらたまった言葉一つは、固く信じようと主婦は思った。

お昼少しすぎた頃、主人はそそくさと外出してしまった。また帰りがおそくなるかもしれない。と思っていたら、「わが大君に召されたあるう」と調子はずれの歌を歌いながら帰ってきた。

「お前たちには、信仰がないから、こんな夜道にも難儀するのだ。僕には、信仰があるから、夜道もお白昼の如しだね。ついてこい」という。貧しい主婦はついていくしかない。

台所で後片付けをしながら、「本当に、この親しい美しい日本の土を、けだものみたいに無神経なアメリカ兵どもが、のそのそ歩きまわるなど、考えただけでも、たまらない」と思った。「この神聖な土を、一歩でも踏んだらお前たちの足が腐るでしょう」。

百年後の日本の貧しい主婦は、この小説を読むでどんな感想を抱くだろうか。主婦の立場から書かれた戦意昂揚の日記文学に見えるが、「主人のいうことは、いつも嘘ばかり」だとすると、大本营発表が主人の言うことと重なってくる。「嘘」の真実を描いて、検閲を免れた名作だと思う。

外はみぞれ、何を笑ふやレニン像 太宰治